

# 日本語隨筆テクストの特徴について —指示語の調査を通して—

立川 和美

## 1. 隨筆のジャンル特性

日本語の文章論では、五十嵐（1909）による西洋の修辞学における分類（記実文、叙事文、説明文、論議文）が紹介されて以後、ジャンルに関しては、波多野（1958）の「緊張体系の成立する方向」による分類や、平井（1970）や市川（1978）などによる文章の機能に基づいた分類などが行われている<sup>(注1)</sup>。そういった中で隨筆は、日本語において広く知られたジャンルでありながら、明確な位置づけがなされていないのが実際である。また隨筆に近いジャンルとしては、モンテーニュ『essais』（1580）に始まる「エッセイ」があるが、これは科学や芸術、宗教に対する批評から、哲学的論考、自伝、小説に近い言説までの広い領域を網羅している。そしてこのジャンルは、規則的なスタイルは存在しないが、時には複雑な論理展開によって筆者の思想が明示されるといった、読者の知的欲求を満たすような内容が中心とされる。

これら両ジャンルでは、共に書き手の個性が重んじられ、その内容に様々な種類が認められるといった共通性がある。しかし、読み手に対する書き手の姿勢は隨筆とエッセイとでは異なっている。例えば隨筆では、読み手の興味に配慮してテーマを選択し、読み手が満足できるように情報提供を行おうとする態度が見られる。そのため、古くから、書き手は自由に表現を行いながらも決して強い調子で説得を行うようではなく、読み手に応じた内容や文体を形成している。そしてこのことが、くつろいで味わい楽しめる肩の凝らない読み物という隨筆テクストのジャンル特性を保証しているのである。このように、隨筆は他のジャンルと関わりを持ちながらも、日本文学の歴史の中で育まれてきた独特のジャンルと捉えることができる<sup>(注2)</sup>。

## 2. 文章論における指示語の先行研究

一般に国語学では、指示語は代名詞の一種だとされているが、時枝（1950）は、代名詞研究の本質は「話し手と表現内容との関係概念の表示」であると考え、これが文章論における指示語研究の基礎となっている。本章では、これに続く研究の代表例を見ていきたい。

まず市川（1978）は、文章の文脈を中心にして、指示語の用法を「現場の事実を指示する」「文脈の中の事柄を指示する」「文脈の外にある事柄を指示する」の3種類に整理している。「連文論」の研究で知られる長田（1984）は、文章中の指示表現を、自らの位置に先行（後続）文からの意義を持ち込むことで未定であった自らの意義を具体的に確定する「持ち込み詞」と呼び、文章におけるその役割を考察している。

また、欧文のテクスト分析の手法を積極的に取り入れた林（1983）は、指示の形式を精緻に分類し、指示に伴う文法上や意味上の「表現の捉え直し」の現象に着目している<sup>(注3)</sup>。英語学や意味論をふまえた池上（1983）では、Halliday & Hasan（1976）を参考にして、テクストにおける指示を、「テクスト内的指示（endophora）」と「テクスト外的指示（exophora）」とに分け、更に前者に「前方照応（anaphora）」と「後方照応（cataphora）」とを認めている。

これらの他、近年の代表的な指示語研究には、認知心理学的なアプローチである金水・田窪（1992）や、計算言語学を用いた亀山（1999）、文章の結束性をふまえた庵（1994）などがある。

## 3. 指示語の分析から見た隨筆テクストの特徴

### 3. 1. 本稿における調査の方法

本稿では、『文藝春秋』の「巻頭隨筆」から任意の50編（2000.12～2001.5）<sup>(注4)</sup>を選び、分析を行う。指示対象に対する書き手の見方や文脈展開への関与という文章に即した観点から指示語を分析することで、それらの現象から浮き彫りになる隨筆ジャンルの特性を明らかにしていきたい。

調査項目としては、第一に、テクスト内に発生したコ・ソ・アを含む用例に関して、その「出現位置」が、形式段落の冒頭文、結尾文、それ以外の中間のいずれの位置にあるのかを調べる。

第二に、堀口（1978）による「コソアの用法」とHalliday & Hasan（1976）の分類を参考に、本稿に独自の以下のような指示分類の項目を立て、その用法を認定する。

- ①現場指示：同一空間を話し手と聞き手が共有する場面で用いる。

- ②絶対指示（場所・時間）：聞き手の位置に關係なく、いかなる場面にも用いる。
- ③觀念指示：思考語・内言・独白に用いる。
- ④文脈指示（前方指示）：文章中の前の部分の内容を指示する場合に用いる。
- ⑤文脈指示（後方指示）：文章中の後の部分の内容を指示する場合に用いる。

今回は文章を分析の対象とするため、④と⑤の文脈指示が中心となることが予想されるが、その他の用法（①、②、③）も文章中に出現する以上、何らかの形で文脈の影響を受けているはずである。そしてそれらは、文脈から類推される内容を示すという点で、文脈指示と連續的な性質を持つものと考えられる。

第三に、各々の「指示内容」の範囲について、指示語と同一の形式段落の中であるのか否か、またはそのいずれでもないのか（現場指示や絶対指示の場合など）、を調査する<sup>(注5)</sup>。以下に、具体的な分析例を示しておきたい。

（例1）そう。produceがキーワード。新しい発見や感動を自分のことは（文字や映像）で表現する。その表現を分かち合うことによって新たな出会いと交流が生まれ、それがさらに新たな発見と感動につながっていく。コミュニケーションがネットワークを再生産していく循環が生まれる。

（「私がNHKを辞めた理由」79(1)）

まず一つめの「そう」は段落の冒頭文に位置する。指示内容は、テクスト中に明示されるのではなく、「私がこれから言いたいことは、読み手のみなさんがご存知の通り」といった意味合いをこめた感動詞の形を持つ「③觀念指示」の用法であり、「その他」に分類される。続く「その」と「それ」は、共に「④文脈指示（前方指示）」で、指示内容は直前に示され、各々の指示語が出現している形式段落の中に指示内容がある。出現位置は段落の中間となる。

以下、具体的な分析に入るが、その前にここで、文章論でしばしば取りあげられる「指示」と「接続」との区別の問題について触れておきたい。これらは共に文章中で「つなぐ」という役割を持っているが、テクスト成立に重要な結束性においては「指示」のほうが「接続」に優先するという考えが一般的である。そこで、（例2）のように、指示内容を理解する手がかりがテクスト中に存在する場合は、「指示」を行う表現と考えて分析を進めよう。

（例2）たとえなんとかつじつまは合わせても、口さがない人々に何を言われたかしれないだろう。それでも劇場をそっくり宗十郎にゆだねた。

### 3. 2. 指示語調査の結果

#### 3. 2. 1. コ・ソ・アの出現状況

今回調査したテクストの中で出現した総数は、コ系347例、ソ系517例、ア系33例で、合計897例である。隨筆テクスト一編ごとの指示語の出現平均回数は17.94回で、その内訳は、コ系6.94回、ソ系10.34回、ア系0.66回であった<sup>(注6)</sup>。なお、一編内での指示語出現総回数の分布は、最少が8回（3編）、最多が28回（2編）であり、平均値に近い部分にやや集中は見られたものの、分布が広く分散しており、今回のデータでは、指示語全体（コ・ソ・ア）の出現度数には顕著な傾向は見られなかった。また特にソ系は分散範囲が広く、更に極端な出現数の多少も見られ、コ系に比べて一編ごとの使用差に大きな違いが見られた。このソ系使用の特徴は、指示語全体の使用頻度の多様性と強く相関しているものと考えられる。加えて、それぞれの隨筆テクストが持つ内容の幅の広さや文体の特性も、この作品ごとの指示語出現の多様性につながっており、こうした多様性こそが、読み手に隨筆を読む楽しさを与えていているといえるのではないだろうか。

#### 3. 2. 2. コ・ソ・アの出現位置

下の表のように、コ系は段落冒頭文に出現する例が約35%と多く、ソ系は段落中間と末尾文の合計が約72%となっている。ここからコ系は段落が変わり、それまでとは内容や場面が切り替わる部分で用いられるのに対して、ソ系は同一の形式段落の中で論理的に内容が展開していく場合に用いられていることが分かる。

また、段落冒頭文に出現したコ系列（120例）とソ系列（139例）に限定して指示内容の範囲を調査したところ、冒頭文の内容を指す例は、コ系列15例、ソ系列44例であった。つまり、ソ系列は同一文中という直前の内容を指示し、指示範囲が狭く限定される傾向が強いといえる。

〈コ・ソ・アの出現位置〉（数値は実数、（ ）は各系の中での割合%）

出現場所	コ系	ソ系	ア系	全体
段落冒頭文	120 (34.6)	139 (26.9)	6 (18.1)	265 (29.5)
段落中間	133 (38.3)	252 (48.7)	11 (33.3)	396 (44.2)
段落末尾文	87 (25.1)	120 (23.2)	12 (36.4)	219 (24.4)
一文で構成される段落	7 (2.0)	6 (1.2)	4 (12.2)	17 (1.9)
合 計	347 (100)	517 (100)	33 (100)	897 (100)

#### 3. 2. 3. コ・ソ・アの指示の特徴

本節では、具体的に例文を示しながら、隨筆のジャンル特性を表す指示語の用法につ

いて考察していきたい。

### 〈コ系列指示の特徴〉

コ系は段落冒頭文の用法が多いことから、その段落で提示される重要な新情報、例えば新たな展開の開始や、発展的内容、筆者の主張などの提示と結びついて用いられることが多い。隨筆では筆者が読者に強く働きかけることは稀であるが、現場性の強いコ系指示は、筆者が自分にひきつけた内容叙述を行おうとする姿勢を表す方策として用いられている。

(例3) 絶望的とも思える状況の中で、このオリーブを植えていく運動が少しは力になれないだろうかと考えている。

(「環境とともに生きる世紀」79(3))

上の「この」は既に述べてきた「瀬戸内オリーブ基金」に関する内容を指し、それまでの事実の描写に対して、この文でテーマとなる「環境」への筆者の考えが提示される。コ系指示によってもたらされる筆者の直接的な語りかけといった性格が、読者をよりテクスト世界へ引き寄せ、これが書き手と読み手の近さという隨筆の特徴につながると考えられる。

その他、コ系では、現場指示及び絶対指示の用法も多く、段落冒頭文に出現した指示の中では29例見られた。

(例4) 身振り手振りを加える独特なスタイルで、あの雰囲気をここで再現できないのが残念なくらいだ。

(「カストロ議長との昼食」79(2))

(例5) 昨秋、李登輝の入院中には台湾大学病院にまで押しかけたくらいだから、こちらも厚かましい。

(「虎口に立った男たち」79(5))

(例6) この十年間、私が死ななかつた理由は三つばかりある。

(「パニック障害とつきあって十年」79(4))

(例4) は自分が現在書いており、やがて読み手の手元に届くテクスト自体を指す現場指示で、書き手と読み手がテクストを介して同一の場に立つと仮定した用法である。

(例5) は筆者自身が自分を「こちら」と場所で表す絶対指示、(例6) は慣用的に用いる時間を示す絶対指示である。(例5) は「私」、(例6) は「最近の」といった表現も可能であるが、あえてコ系指示を用いて自他の関係性を明確化することで、読み手が

書き手と同一の視点を持つような場の共有が図られている。ここから、隨筆テクストが、文章でありながらも受け手（読み手）への意識が強く、多分に談話的要素を持っているということが分かる。

#### 〈ソ系列指示の特徴〉

ソ系の文脈指示ではその指示範囲が比較的狭く、当該段落や当該文中といった直前の内容を示す用法が多かった。また、作品によってはその筆者特有の文体として多用され、短い範囲で連続的に登場し、それが鎖状に繋がって文脈を形成する次のような例が見られた。

（例7）大井三つ叉の交叉点にかかっている歩道橋の螺旋状の階段を降りきったところに物置小屋のような古道具屋「時代屋」という屋号の渡瀬恒彦の店がある。その店に銀色のパラソルをくるくるまわしながらその歩道橋を渡って、ふらりと現われ、そのまま住みついてしまうのが夏目雅子。

（「アゲイン」79(2)）

#### 〈ア系列指示の特徴〉

ア系は、基本的には書き手と読み手の共有知識に基づく指示であるが、読み手が持つ経験や知識とは、先行文脈の内容を受けて活性化されたものであるといえる。つまり、ア系が指示する対象は、読み手がテクストを離れて獲得された知識や体験に加えて、文章の読解を通して共有されていく部分が大きいのである。読み手は、指示対象に関する情報について、文脈を追いかながらその内容を想像していくことで、書き手との共有を確実していく。以下、具体例を取りあげてみたい。

（例8）私は結局この『シャイン』は見ずじまいだったが、もし見ていたら、そして映画が評判通りの感動の名作だったら、ヘルフゴット氏に対する印象も全く違つてあの素人っぽい演奏にもかえって感動していたのではないか。

（「ヘルフゴット現象」79(3)）

この隨筆を実際に読んでいる読者の中には、ヘルフゴット氏の生演奏を聴いた経験を持つ人は極めて少ないだろう。そこで書き手は、直前の部分で、彼の「専門家たちの鑑賞に堪えるようなものではなかった」演奏や、「悲しげな微笑を浮かべてオドオドとした様子などを細かく叙述しており、読者はそれを読むことで書き手の体験を追体験していく。よって（例8）の「あの」は、書き手が、読み手という本来時空間を共にすることのない他者を、自分と同じ領域に立つ者へとシフトさせることで成立する指示だと

いえる。本来、書き手内部に存在するア系指示の対象が、読み手のスタンスを考慮しながら叙述するといった、書き手から読み手への歩み寄りの作業を通して、読み手の内部にも存在することになるわけである。

#### 〈ソ系・ア系の感動詞の用例〉

この他に目についた例として、感動詞に含まれるソ系やア系の用法が挙げられる。これらは先行研究においては、テクスト分析の対象外とされてきたが、文章内容と関わりを持ち、文体的特徴やジャンル特性をつかむ方策としても有効な要素だと考えられる。次の例を見てみたい。

(例9) 「そうだなあ。私の場合、一、二割くらいかなあ」

(例10) 「あのさあ、語末に『シャ』とかいうのあるでしょう。」

(「これも一種の学歴信仰」79(3))

(例9) は、先行文脈にある質問（大学で得た知識や教養、技能が社会に出てどの程度役立つものなのか）に対して考え込む時、(例10) は、電話の会話で相手に話しかける時に発せられた言葉で、いずれも文脈が形成する「場」と密接に関係している。また今回の例は「 」でくくられた具体的な発話だが、隨筆テクストでは地の文が筆者の直接の語りであるというスタイルもしばしば見られ、その場合には地の文でもこうした感動詞は使用される。これらは、テクストに現場性を与える他、読みやすさなどの文体的特性にもつながる性格を持つ指示の中の一つの種類と見ることができるだろう。

## 4. おわりに

文章における指示語は、文脈展開や結束性に大きな役割を果たすと同時に、書き手の指示内容に対する姿勢や、読み手との関係に対する意図を示す。本稿では、文章内に出現するコ・ソ・アの指示内容を基本的に文脈に関わるものと考え、その出現の特徴を通して隨筆テクストのジャンル的性質を探った。そこから以下のようない点が明らかになった。

- ①文脈指示では、コ系は段落の冒頭文に登場して新しい展開や筆者の主張と結びつき、その現場性から筆者と読者とを近づけるといった隨筆テクストの特徴を生み出している。ソ系は筆者ごとに使用頻度に差が見られ、比較的短い範囲を指す用法が多い。
- ②従来のテクスト分析では対象とされなかった用法だが、コ系は絶対指示や現場指示などでも用いられ、ア系は筆者が読者に歩み寄る形で内容説明を効果的にし、指示内容を確かなものにしている。これらは、書き手と読み手の場の共有といった隨筆ジャン

ルの談話的特性を示すものである。

③隨筆テクストでは、会話・地の文の双方でソ・ア系の感動詞が文章内容と密接に関係しながら用いられている。これは指示使用を通して現場性を強めることに加え、ジャンルの文体的特徴を示す要素としても働いている。

今回の分析は、指示語を通して隨筆ジャンルの特性の一部を考察することができた。指示語の役割はテクストのジャンルと深く相關していることから、今後は、他ジャンルとの比較などを通して、より深い分析を行っていくことが課題である。

### 注

- (1) 波多野（1958）では「叙述の文」と「説得の文」、市川（1978）では、文章の受け手に関して「特定・不特定・後日の相手」という分類が行われている。
- (2) これらのジャンルに関する研究には、吉田（1990）やグロード&ルエット（2003）がある。また萩原朔太郎は、「隨筆が『花鳥風月の趣味性を中心主題とする』のに対し、『この趣味性の代りに哲学観を入れ代へたもの』をエッセイだとして、両者を明らかに異なるジャンルと認めている。
- (3) 林（1983）の分類では、指示が大きく「内容指示」と「メタ指示」とに分かれている点や、「自己文脈指示」と「相手文脈指示」といった規定などが、興味深い。
- (4) 平成15～16年度科学研究費基盤研究（C215520296）『日本語の談話における結束性の研究—『文芸春秋』卷頭隨筆を対象として』（研究代表者 高崎みどり）のコーパスを利用した。以下、各例文の後にはその題名と巻（号）を付す。
- (5) 日本語の文章の段落については多くの議論が見られるが、今回はテクスト上に明示された指標の一つとして利用するにとどめる。また「指示内容」の範囲の厳密な決定はその文章の解釈と関わり、必ずしも一定とは限らないことが多いことから、出現する当該段落（形式段落）を越えるか否かと、大きく捉えることとした。
- (6) エッセイや社説を調査した竹田（2001）には、ソノ2562例、コノ1939例、経済学評論を調査した三枝（1998）には、ソ系2739例、コ系3926例というデータが示されている。

### 主要参考文献

- 五十嵐力（1909）『新文章講話』早大出版部
- 庵 功雄（1994）「結束性の観点から見た文脈指示—文脈指示に対する一つの接近法—」大阪大学『日本学報』13 31-43
- 池上嘉彦（1983）「テクストとテクストの構造」『日本語教育指導参考書11 談話の研究と教育I』国立国語研究所 7-42
- 市川 孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 亀山 恵（1999）「談話分析：整合性と結束性」田窪行則他編『岩波講座言語の科学7 談話と文脈』岩波書店 93-177
- 金水敏・田窪行則（1992）「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『指示詞』ひつじ書房 123-149

- P.グロード&J.F.ルエット著／下澤和義訳（2003）『エッセイとは何か』法政大学出版局
- 三枝令子（1998）「文脈指示の「コ」と「ソ」の使い分け」『一橋大学留学生センター紀要』創刊号 53-66
- 竹田完次（2001）「ソノとコノの文脈指示」『計量国語学』23(2) 91-109
- 時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店
- 長田久男（1995）『国語文章論』和泉書院
- 萩原朔太郎（1936）「アフォリズムに就いて」『セルパン』昭和11年6月号
- 波多野完治（1958）『ことばと文章の心理学』新潮社
- 林 四郎（1983）「代名詞が指すもの、その指し方」林四郎他編『朝倉日本語新講座5 運用I』朝倉書店 1-45
- 平井昌夫（1970）『文章表現法』至文堂
- 堀口和吉（1978）「指示語コ・ソ・ア考」『論集日本文学日本語5 現代』角川書店 137-158
- 吉田精一（1990）『隨筆とは何か』創拓社
- Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. Longman